

福島第一原発事故における一時帰宅者の救護活動

2011年8月22日 副院長 内山政二

場所:福島県川内村、村民体育センター

期日:8月20日(土)

班員:内山副院長、深井経営企画室長、関看護師、太田看護師



厚労省の要請により、国立病院機構が何カ所かの一時帰宅者用の救護所で活動している。今回出向いた川内村は、一部が20キロ圏内の警戒区域に含まれ、役場や学校も含めて全村避難が続いている。

当日の最高気温は23℃と涼しかったが、それでも防護服の帰宅者は暑かったとのことであった。救護患者は帰宅者64名中8名、主な内容は車酔い、軽度脱水、頭痛であった。いずれも軽症であり、病院搬送者はいなかった。救護所脇には自衛隊の除染部隊も待機していたが、一時帰宅から戻った時点で除染が必要となった人はいなかった。同行した当院の職員は、手際よく活動してくれた。



福島第一原発事故に伴う住民の一時帰宅における医療班の派遣について(概要)

国立病院機構西新潟中央病院

◎活動日

2011年8月19日(金)～2011年8月20日(土)

◎派遣場所

川内村村民体育センター(福島県双葉郡川内村)

◎班員構成

	職名	氏名	配置
1	副院長	内山 政二	診療部
2	看護師	太田 直之	4病棟
3	看護師	関 悟	6病棟
4	経営企画室長	深井 和久	企画課

◎行程等

○2011年8月19日(金)

・病院発 15時20分
・宿泊地着(郡山市内) 17時20分

○2011年8月20日(土)

・宿泊地発(郡山市内) 8時45分
・現地着(川内村村民体育センター) 9時55分
・医療活動 10時30分 ～ 16時30分
・現地発 16時45分
・病院着 19時45分

◎一時帰宅者数

・富岡町住民 44世帯 64名(バス6台)
・関係者 30名程度(各バスに5名程度同乗)

◎医療活動概要

・酔い止め薬処方 6名(出発前)
・脱水、乗り物酔い等 2名(一時帰宅後)
(前日より気温が23度程度に下がり、熱中症の危険が減ったこともあり、重症者はいなかった。)

福島第一原発事故に伴う住民の一時帰宅における医療班の活動報告

6 病棟看護師 関 悟
4 病棟看護師 太田 直之
経営企画室長 深井 和久

2011年8月20日、福島県の川内村へ富岡町住民の一時帰宅における医療班として派遣された。19日の午後、病院を出発して郡山市で前泊、20日朝に現地へと向かうスケジュールであった。

出発直前はかなり大きな地震があり、地震情報を確認すると派遣地付近は震度5弱とのこと。放射線に加え、余震もあるのかと不安が募ったが、医療班の隊長である内山副院長から、「今日大きな余震があったから、当分大きな余震はないよ。」と、励ましの言葉をうけチーム4人で病院を出発した。

派遣場所である川内村村民体育センター周辺の環境は、持参した線量計で測定すると0.5マイクロシーベルト、施設内は0.1マイクロシーベルトと人体に有害な影響を及ぼすほどの値ではなかった。前日に雨が降り、気温も23度程度でそれほど暑さを感じなかった。施設内には地元の救急隊員が在中し、施設周辺にはヘリポートもあり、重篤な急患が発生した際にはすぐに災害拠点病院等へと搬送する準備が整っていた。救護所として与えられたスペースは8畳ほどの広さの体育館の休憩所で、長椅子5脚、長テーブル2台、衝立6枚ほどが置いてあり、補水用の500mlのペットボトルとクーリング用の冷却剤が大量に用意されていた。テーブルや長椅子等で診察スペースを確保し、患者が横になれるよう長椅子等を配置した。

一時帰宅の際、住民の方全員が防護服に身を包み、それぞれの自分の住んでいる地区に向かうバスへ乗り込んで出発となるが、住民の方々からは緊張感が感じられ、一様に表情も硬かった。夏の気温の高さと防護服を着ていることから熱中症や気分不快を訴える住民の発生が予想され、また持病等のチェックの為に事前に問診票を配布し、記載された内容から医師の処方の下、車酔いしやすいと答えた方へトラベルミンを事前に手渡す。その後、一時帰宅に向かうバスを見送り、緊急時に備え施設内で待機した。待機中緊急事態の発生なく、予定通りバスは施設に戻り、住民の方々には放射線量の測定を行う。放射線量が高値であった方は除染作業を行うが、今回の一時帰宅では放射線量が高値の方はいなかった。測定後、汚染された防護服を破棄し医師の問診へと移る。

帰宅後に施設内で体調不良を訴えた住民の方は2名で、1名は20歳代女性で脱水の診断。倦怠感の訴えもあるが、バイタルサイン異常なし。頭部クーリング実施、水分補給、長椅子に臥床安静を促し改善した。もう1名は70歳代男性で気分不快の訴えあり。バイタルサイン異常なし。ナウゼリン内服後に水分補給し長椅子で臥床安静を促し改善した。比較的気温が低かった事から、熱中症の発生も無く、また、帰宅中の外傷の発生もなかった。

今回の医療班への参加には、被災地の方々のために何かしたいという気持ちが大半をしめていたが、災害時の医療の在り方を学びたいという気持ちもあった。対岸の火事と傍観を続けていてもその火の粉が自身に降りかかる事もある。今回、実際に被災地を目にすることで、自身の周囲に同じような災害が起こった時、病院職員としてどのように動くべきか考える良いきっかけになった様に感じる。自身の専門分野に関し、柔軟な対応が出来るだけの知識・技術を磨いてゆくと共に、今回実際に被災地を見て来たことを活かして、病院内においても非常事態が起きた際に、どのように動くべきかを日常的に考えていきたい。